



寄稿

# 浅間山南麓の黒ボク土大地の歴史

御代田町浅間縄文ミュージアム 学芸員 芹沢 一路

国土の約30%、県土の約16%を占めている黒ボク土は浅間山の南麓にある御代田町にも広がっています。今回は、御代田町にある縄文時代から平安時代までの考古遺跡(図1)から黒ボク土と人々の関りを見ていきます。

浅間山は、日本に111体ある活火山の一つで標高は2568mあります。約10万年前に誕生してから、数多くの噴火を繰り返す中で山麓の地形や土壌が形成されてきました。

御代田町で縄文人の痕跡が最初にみられるのは約12000年前になります。その後、約7000年前になると本格的なムラが営まれはじめ、約5500年前から約4000年前には全盛期を迎えます。国重要文化財の焼町土器が、大量に出土した川原田遺跡はこの時期の遺跡になります。浅間山南麓は、南斜面で豊富な湧水があり、山麓の広大な森は狩猟採集を生活の基盤とした縄文時代の人々には魅力的な土地でした。

西駒込遺跡の発掘調査では、天仁の大噴火(西暦1108年)で発生した追分火砕流の下に黒ボク土層が堆積していました(図2)。その黒ボク土層の下からは加曽利E2式(約5000年前)の住居跡が検出されています。浅間山の山麓における黒ボク土の堆積する過程を見る事ができる良い事例です。



図2 西駒込遺跡の黒ボク土層

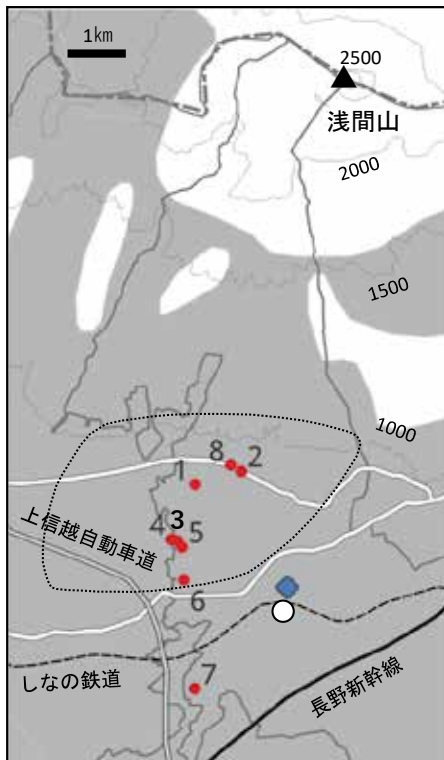
稲作が開始された弥生時代が始まると浅間山南麓では、人々の営みの痕跡がみられなくなります。本格的な稲作が始まるのは、弥生時代終末(約1700年前)の細田遺跡と下荒田遺跡になります。弥生時代中期に稲作が始まった佐久平からはだいぶ遅れた時期になります。

原因として水利の確保が難しく高冷地である事が考えられます。また、黒ボク土が植物の成長にかかせないリン酸と強く結合する性質がある事が、植物栽培を難しくしていました。この黒ボク土に関する課題は、戦後に化学肥料が普及するまで続いていく事になります。

水田化が進まなかった浅間山南麓は、古墳時代に大陸から伝来した馬の生産を始めるのには格好の場所でした。塚田古墳群K-4号墳(西暦600年代前半)や、めがね塚1号墳(西暦600年代後半)から馬具が出土しています。

そして、平安時代には朝廷管轄の御牧の一つである塩野牧が設置されました。野火付遺跡からは馬の全身骨格(800年代前半)が出土しています。他にも、広畑遺跡のH-1住居址は、馬の生産を担った人々が暮らしていた痕跡がみられました。

以上の様に、浅間山が生み出した地形や黒ボク土が各時代の生業に深く影響を与えた事がわかります。近年では、黒ボク土が縄文人による野焼きによって形成されたという興味深い説が提唱されています。今後は、日本の国土の多くを占める黒ボク土について学問の枠を越えて活発な議論がなされていく事を期待します。



- : 1 川原田遺跡      2 西駒込遺跡
- : 3 細田遺跡      4 下荒田遺跡
- : 5 塚田古墳群跡   6 めがね塚古墳
- : 7 野火付遺跡    8 広畑遺跡
- : 塩野牧推定範囲
- ◆ : 浅間縄文ミュージアム
- : 御代田駅      ■ : 黒ボク土

図1 浅間山南麓の黒ボク土と遺跡分布